

曾野綾子

絶望からの出発

私の実感的教育論

曾野綾子

絶望からの出発

私の実感的教育論

講談社

絶望からの出発＝私の実感的教育論

昭和50年5月10日 第1刷発行

昭和50年6月25日 第4刷発行

著者 曾野綾子

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 郵便番号 112

電話東京(03)945-1111(大代表) 振替東京3930

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 株式会社上島製本



©Ayako Sono 1975

(落丁本・乱丁本はお取り替えいたします)
☆定価はカバーに表示してあります

Printed in Japan

0095-260561-2253 (0) (増)

も
く
じ

1	子供は親の思い通りには育たない	9
2	・人間の予測をいつも超えてしまう教育の成果 ・教える前にまず親は自分を正しているか ダメな親の方がまだ偽善的な親よりよい	19
3	・教育の目標をどこにおくか ・子供のためという言葉にすり換えて自分を正当化する親 悪い環境もまた子供を育ててくれる	29
4	・もし、子供が理想的な状態の中で育てられたら・悪い環境に育った子供は恵まれている・親はいつか子供の前から姿を消すことが最終目的 子供の事故や病気の責任は親にある	39
5	・音楽だけで情操教育ができるか ・さまざまな小さな危険を体験をさせる・責任を社会に押しつける母親 しつけは家庭でしかできない	49
	・めんどうでも子供に手伝わせる ・なぜ子供が敬語を使えないか・子供の無邪気を押しつける母親	

6	相手の立場を考える心を教える	59
---	----------------	----

- ・相手の立場を考える人は少ない・いまの社会に浸透している思考停止
- ・不潔にも耐えられる神経の持ち主に

7	ひんぱんに正しく子供を褒める	69
---	----------------	----

- ・一人の不幸な老人の話・叱ることより褒めることを先に
- ・きれいごとの褒め方は危険

8	常識にとらわれない自分の価値観を作る	79
---	--------------------	----

- ・社宅より持ち家に住んでいる人の方が上等か・「常識」に従っていれば、
- どこから非難されないが・群から離れる勇氣

9	「何でも人並みに」という考えを捨てる	89
---	--------------------	----

- ・正しく他人を理解することなどできない
- ・他人もしているから何をしてもいいのか

10	「信じること」のほんとうの意味を教える	99
----	---------------------	----

- ・迷う子供の方がよい・「先生はいつも正しい」とは限らない
- ・「信じること」は物事を鵜呑みにすることではない

11	幼児のときこそ体罰で鍛える	109
----	---------------	-----

・親が子供を叱れなくなった理由・親は子供に媚を売ってはならない
・ほめ上手は叱り上手でもある

12	教育にお手軽な効果を期待しない	119
----	-----------------	-----

・モナリザをチラッと見て何が得られたか・今すぐ必要のない認識を身に
つけさせる・「貧乏人はいつも正直者」という御伽噺おとぎばなしを信じてはいけない

13	受験教育が招いた利己的な他罰精神	129
----	------------------	-----

・先生に当たりはずれがあるか・「不利益には黙っていない」ことを教える
先生・先生を告発してどんなトクがあるのか

14	小さな信念を貫き通す勇気をもたせる	139
----	-------------------	-----

・ヒステリー先生と人情先生・自分を守るのは自分の体力と知恵しかない
・正しいと思うことを書いても匿名にする心理

15	正当な競争をさせて精神を鍛える	150
----	-----------------	-----

・自分より強い者がいることを知る意味・「外面的評価で人間は決まらない」
ことを教える・通信簿の評価はあった方がよい

16 親がまずまっとうに生きてみせる 160

・子供をとりまくすべてのことが持続的な影響を与える・私と息子を育ててくれた「ばばちゃん」の生き方・親は子供にとって土である

17 簡単な心理学を覚えて応用する 170

・なぜ子供がご飯を食べてくれないか・道草の楽しみを奪った親たち
・誰でも禁じられると欲しくなるといふ簡単な心理学

18 緊張を続ける訓練をさせる 181

・見事なある財界人の令嬢・子供を甘やかせて緊張を欠いた人間を育てている・緊張の訓練を受けなかった人がストレス病になる

19 世の中は理論通りに行かないことを教える 191

・「地震なんかで死んでたまるか」といふ奇妙な発想
・やはり地震で人は死ぬ・人間の予測はいつもはずれる

20 与える立場の豊かさを教える 202

・乞食がいなくなったことの功罪・他人よりトクをしたがる新しい乞食層・もらう立場だけにたつ人の人生はいつもみじめである

原始的な生活技術を身につけさせる……………212

・境遇の変化に耐えうる人間に・生きて行く上で基本的な技術を覚えさせる・横井さんの生活がなぜ人の心をうつか

自分を持つ人だけが教育できる……………222

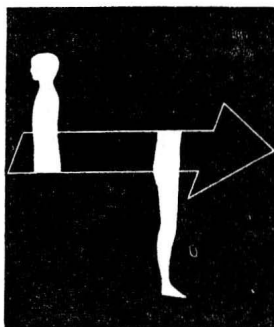
・見栄は人を真実から遠ざける・悪いのはみんな他人という考え方・宗教の本質とは何か

絶望からの出発
私の実感的教育論

曾野綾子

本文イラスト／福田繁雄
装幀／原弘

1 子供は親の思い通りには育たない



人間の予測をいつも超えてしまう教育の成果

私はこれから、確かに教育についての、或る種のエッセイを書こうとはしているのだが、それは、私が、教育についてわかっていくつもりだからでもなく、自信があるからでもないことを先に述べておかなければならない。

私は今年大学一年になる息子を一人だけ育てた。今日までの所、彼は大体、人並みであり、法にふれるようなこともしていない。それだからこそ、私はこういう所で、教育に関するエッセイを書くお許しを得たのだろうと思う。それが世間の常識というものである。しか

し、私の息子は、明日にも、ケンカのあげく人を殺すかも知れないし、酔っぱらい運転で人をはねるかも知れない。その場合、私は一人の母として、教育について言う権利をさしとめられそうである。

しかし、そんなものだろうか。子供がさまざまな形でぐれてしまった母がいるとして、その母は、果して教育的でなかったのだろうか。

事はそんなに簡単ではないのである。むしろ、その母は、普通の母より教育的であり過ぎたから、子供はぐれたのかも知れない。

私が、小さな教育に関するエッセイを書くと思ったのは、或る意味では、世の中で教育的と言われていることで、どうも自分の心にしっくりと定着しないものが多いからであったかも知れない。本当にそうなのだろうか。それなら、私はどうもダメだ、と思うことがよくある。

もちろん、私は決して謙讓でも素直でもないから、このあたりで、そろそろ地を出すのである。なかに、こればかりがやり方じゃない。教育に定型なし、である。私のやり方だってマンザラ悪くはないのではないか……。

自己肯定と自己否定は、同じくらい大切なものであるらしい。自己肯定だけの人間は、やり切れないが、自己否定だけしていると、生きていられないからである。私は自信を失いながら、居なおる。居なおりながら、実は内心から決して自信満々なんじゃないんだだけだなあ、と考える。恐らくこれからこのエッセイを書きながら、この私の二つの顔が交互にのぞ

くであろう。自己肯定の顔も醜く、自己否定の表情もいやらしいものである。しかし、それならばどうして生きたらいいのかわからないから、私はこの矛盾した二つの弱点を、醜悪な人間の一つの顔として自然に覗かせてしまう。お許しを頂きたい。

私は素人として、第一の疑問からゆっくり考えてみたいと思う。果して教育は可能かということである。

私は、今、我が家の小さな書庫に降りて行き、しかるべき本を探せば、この点に関する幾つかのきちんとした答えはたちどころに見出せるであろう、と思う。しかし、私は廻り道であつても、答えが出なかつたと、今、自分の実感からだけ、考えてみたいのだ。

教育は可能か、ということについて、「可能である」という答えはまず、私の中に浮び上つて来る。

私はこの頃、祖父から父へ、父から息子へと三代を同じ仕事に生きた家系によく出合うようになつた。この場合、かなりよくできた三代目は実に闊達である。その仕事の虚しさも愚かしさも知り抜いたところから足を踏み出そうとしていて危げない。少しよくできた三代目は非常に用心深い。その職業につきものの危険が、あらゆる角度から見えすいているからである。

いずれにせよ、それらは、人為的に揃えられた材料をうまく使った教育によって、他人よりも早く深く、その道について知り、考え得るようになることを示している。

それならば、それらの有効な材料も持たず、教育的意図も何もない環境におかれた場合の

人間は全くだめになるかという、そうでもないのである。

怠けものの父と、酒乱の母親との間に生まれた息子として育ち、常識的に見ると、子供の足を引っ張るようなことしかしなかったように見える両親をかかえながら、人並み以上の教養を身につけ、人並み以上の仕事をした人を私は知っている。この場合、そのような両親の生活から脱け出すこと、そのような両親を超えること、がその青年の目標になった。これはすばらしい教育的状況なのである。

肉体的に五体満足な子であることを我々は願う。しかしヘレン・ケラーはやはり五体満足でなかったからこそ、それを足がかりに自分を教育したのであった。

私は十代の前半に戦争を体験した。そしてその中で、生きていること（文字通り、只生きていること）の本当の意味を知ったように思う。そうでなければ、私は死について、今とは全く違った（はっきりに言えば懂れるような）感情を持ち続けたかも知れない。私は戦争によって、死が、てっていい虚しいものであることを理解した。一度死に脅かされた経験を待つと、私の場合はもう自ら、死のうとは思わなくなった。

戦争は、私にとって、大きな教育の場であった。そこで亡くなられた方々のことを考えなければ、戦争は私にとって一つの資産と言える。

自分をとり巻く周囲の状況が、悪かったからこそこれ迄になったのだ、という人は世間にかなり多い。これは嫌味ではない。実感である。多くの人は、自分に与えられていた幸福にも感謝するが、同時に不幸にも感謝できるのである。教育は治療と似ている。医者は薬を与

え、手術をして、患者を「癒す」という。しかし、医者の中でも謙虚な人々は「病人が自らを癒す力に、手を貸しただけだ」という。その証拠に、どんなに人間の力を注いでも、人間の一生に一回だけは癒らないのである。

教育もそうである。教育とは、或る人間が（多くの場合、年齢の上のものが）他の人に（年若いものに）与えるもののように考えられている。これは一面その通りなのだが、半面、そうでもない。人間は自らを教育するだけである。他人は（親や教師といえども）それに少し力を貸すだけという言い方もできる。

私たちはいったいどうしたらいいのか。子供に持たせる鉛筆の種類にまで気を配ってやっても、ダメな子はダメなのである。いや、そういう言い方は不正確である。鉛筆一本に配慮することが、或る子には親のはげましとうつり、或る子には依頼心を育てる温床になるのである。いったいどうしたらいいのか。

答えは誰かが出しているのであろう。しかし私は教育の出发点も、このような迷いがあり、教育の究極もまた迷いにあると思う。勿論、日常の平凡な生活の中では、親はできれば一本の鉛筆に、よくあれと思いつつ「配慮」するのである。しかし、自分のしていることを信じてはいけないと思う。私はどうしても教育の成果は、人間の予測をはるかに超えたところにあると思えてしかたがない。教育の成果を確実に受けとめる部分がないでもないが、それは人間全体の要素のほんの何分の一かであらう。

しかし、そのために、私たちは努力して悪いわけではない。未完に決っている人生を送るた

めに、私たちがあくせくと生きるように、効果の期待し得ないことに向って努力すること、私は、私のかなり好きな生き方である。

教える前にまず親は自分を正しているか

教育が、教育する側と、教育される側とはっきりと別れるという考え方も、私は時々恐ろしいものと思う。

たとえば算数を教える時、教える側が教師で教わる側は生徒だ、という関係はなり立つ。しかしそれは比較的単純な技術の教育に関する場合だけである。

教育は全人的なものだということを、私たちは、よく耳にする。教育は小手先、口先でするものではない。もしするとすれば、全人間をあげてするものなのである。

現代は、教育不在の時代なのかどうか、子供が大きくなってしまった今、私にはよくわからない。只、風俗的なニュースとして耳に伝わる限りでは、教育そのものより、教育技術が先行している時代だということは言えそうな気がする。そしてこの技術先行の不均衡は今後ますます、ひどくなるかも知れない。なぜなら、親たちの多くの求めるものは、子供に知識、或いは学問技能の部分がしっかりと身につくことであって、総合的な人間の豊かさでない限りそうなるのは明瞭である。総合的に豊かな人間などというものは、むしろ生きて行く上にヤツカイなものである。それは懷疑的であらうし、分裂的であらうし、入学試験にいい点をとるためや、出世街道をひた走るためには、決してプラスの働きをしないからである。